

1990 年 10 月 1 日，中国科学院、中国工程院两院院士大会在北京人民大会堂隆重举行。这是新中国成立以来第一次在人民大会堂召开的院士大会。大会由江泽民主席主持，江泽民在会上的讲话，对两院院士提出了新的要求，指出：“两院院士是国家的宝贵财富，是国家的栋梁，是国家的骄傲。你们要继承和发扬老一辈科学家热爱祖国、献身科学、勇于攀登、团结协作的精神，为国家的科技进步和社会主义现代化建设做出更大的贡献。”

1. 中国科学院院士

中国科学院院士是中国科学院的终身荣誉，由院士大会选举产生。院士大会由院士组成，是两院院士大会的重要组成部分。

で教育委員をされておられたので山城の入試について照会したら、なんと願書締め切りは三日後の土曜日午前中・入試は二月上旬、願書の用紙も同封したとのご返事速達でいただいた。この後三日間大人達は大変だった。当時京都への最速直通列車は夕方出発・翌日十時半到着の準急列車が一本運転開始されたばかりだった。二日目の夕方に願書を持って乗っても京都駅から山城に直行してやっと締め切りまでに到着可能な状況万一列車遅延があれば駄目になる。坂田先生に電話すると「その場合はやむを得ない事情ゆえ待ちましょう。丁度当日の日直は甲斐道太郎先生だから到着の確認をしておきます。」とのご返事で母は欣喜雀躍、中学の担任に内申書を明日午後三時まで書いて下さいとお願いに行った。ところが担任は三学期の試験も未だから受験用の内申書は書けないし、仮に書いても一日では無理だし、レベルの高い地域の入試を準備もなしに受けさせるのは無理だからやめた方が良いという意見だったらしい。結果、やりとりの挙句、翌日午前中に書いて下さった内申書・願書を身内の者が準急で持参して無事出願が完了した。なお今から五年前担任の先生は満百五歳で他界され、同じ頃母も満百歳で没したが、晩年まで交流があり、私たちが顔を合わせるとこの時の思い出話に花が咲いた。共に教師だった二人が子供の教育についてかなりの遣り取りをした事が解ったものだった。当の本

人は希望と不安の綾なす事態の急変のなかで受験勉強の猛特訓を受けた。こうして多くの方々のご縁に導かれ、厚意を沢山頂いた山城高校生が一人誕生した。応援して下さる方々が近くにおられることは心の支えとしては貴重であったが、日々の学校生活では学区内の各中学から夫々集団で大学進学して来た級友の中では単独行動が多くならざるを得なかった。当時は一時限毎に学科によって人員編成が替わり夫々が教室を求めて移動する方式で、クラス全員が一緒になるのは毎日一回のホームルームの時限のみであった。一日中同じ顔触れが同じ教室で過ごす方式に比較し仲間に溶け込むのに時間がかかるが、大分と京都の風土の違いに戸惑いながらも、坂田君・甲斐君やその友達を中心に「友達の輪」を広げる日々を送っていた。

或る日ホームルームが自習になり、男子の大半は校外へ出て「名利探訪」と洒落込んだのでチャンスと思い参加した。初めは等持院に向かい、聞くと未だ行ったことがない人が多いではないか。ところが私といえば大分の田能村竹田と並び賞賛される高名な南画家であると同時に「易経」の研究者として知られる甲斐虎山先生に名前をつけていただき、代表作として知られる和里子先生の「草かご 其の二」に出生前後のことを書いて頂いたばかりでなく、戦争中、ご夫妻が別府や大分・坂ノ市に疎開しておられた時には度々お邪魔して可愛がって頂いたが、

この時点では甲斐先生ご一家が等持院境内の奥にお住まいのため山城入学以来何度もお使いなどでお邪魔し、ついにて等持院も拝観済みだった。このため思いがけずみんなを案内するという逆転現象が起きて少し仲間入りが出来た感じがした。

次は竜安寺だった。ここは初めてなので後方を歩いた。池を左に見ながら進むと左前方に長い塀が見えている。あの塀の向こう側に有名な「虎の子渡し」があると教えてもらった。是非みたいと思うもののお金も時間も無いので諦めて左折して塀に沿って歩く。良く見ると半分過ぎから先には塀に足場が掛かって居るではないか。しかし前を歩く級友はそのまま通り過ぎて行く。中を見たいという気持ちが大分育ちの野性に火をつけた。列を離れ、校章を隠すため学帽を脱いで、足場の安全を確かめて飛び乗り中を覗くと塀の真下は良く見えないが、思いがけず広い白砂に石が幾つか見えている。後ろを振り向くと、続いて跳び乗ろうとする者・制止しつつ降りて来いと言う者が集まって来ていた。私は慌てて思わず「見たい人はどこかの学生か判って跡から怒鳴り込まれないように学帽を脱いで順番に上がってくれ、向こうの方には僧侶の姿も見えているから大きい声も出さないでくれ、決して沢山乗って足場を壊さないようにしてくれ」と指図して交代した。途中まではうまく運んだが後半やはり群衆心理が出た。焦った後半グループの何人かが一

度に乗ったところミシミシと音がしたのに、自分だけが見損ねたくないと思ったか、最後の一人までもが制止を聞かずに跳び乗った。途端に足場が半壊した。幸い大音響は出なかったので、多分気付かれていないと読んで、走り出すのを制止し、依然学帽は脱いだままにしてさりげなく早足で寺の外に出て、そこからは一斉に駆け出した。ただし念には念を入れて真っ直ぐには山城を目指さぬように提案し妙心寺北門から入り、大分出身の住職だったので度々お使いに来ていた塔頭の大通院の前を通りながらここはあの山内一豊の菩提所だと説明したり本堂前で休憩した後、正門を抜け木辻通り経由で帰校した。休憩の際に、学校へ直行しないのは雲雀が上空から帰ってくる時は真っ直ぐ巣を目指さず少し離れた所に降りて追っ手をだます習性に倣っていることを話したり、因みに舞い上がる時には巣からパーと上がるので注意していると巣が見つかったことなどを話した。ついでに蓮華の花咲く田んぼで毎日暗くなるまで草野球や雲雀追いをした春、名月の夜を中心に御供え物とか柿・夏蜜柑などのなりものを失敬しても捕まりさえしなければ大目に見てもらえた秋（当時大分ではミーゲンさまと呼んだ風習）も紹介し、こうした体験をもつがゆえに新参者のくせに強引にことを進めた点を詫びた。寺からのクレームも受けず、この日以来級友も一層理解してくれたし私も大分育ちを恥じる必要もないことが

判り、積極的に仲間に入れ込んで行くことが出来た。振り返って幸せな山城生活を送らせてもらったことを先生・級友に感謝している。

しかし今回この文章を書きながら教育の場面に問題が山積する現在ならどのように溶け込むのかと対比して考えてしまった。自習時間でも友人と行動するよりケイタイやゲームなどに熱中して外出しないだろうし、出掛けても平和な世の中で子供時代から観光慣れしている者には近くの寺院を探訪する気にもならないだろうし、究極的には知らない者には当たらず触らずで係わりたくないという者さえいるというから、そんな級友の中に溶け込む困難を想像した。関係性の開発・維持・発展の困難な時代に成長する人の苦悩と、そうした人達が多数を占める時代が到来した時の社会の苦悩を思うと、上記の懐旧談には事態改善の芽もなくあまり意義があるとも思えなくなってきた。

しかし山城同窓会の記念文集としての役割を考え、一例をあげれば国の発行する米の配給切符なしでは米は買えず、闇米の運び屋が駅手前で下に待つ者に米を投下する姿が日常化するなど社会の混乱が残ってはいたが、発展に向かって国中が走り始めた時代に幸せな高校生活をスタートさせてもらった人間の思い出を記録として書かせて頂くこととした。